

「よむ」学習行為論

— 漱石の『吾輩は猫である』の「よみ」を例として —

中 刈 正 堯

一 「よむ」という体験

「体験」を、素朴に、生活の中で出会う「もの・こと・ひと」について、日々を確認し、発見し、その感想・意見をもつこと、と定義してみよう。その「もの・こと・ひと」（自分と自分をとりまく現実世界）には、言語とのかかわりでいえば、話されるもの、書かれたもの、映像化されたもの等がふくまれる。

そうなると、生活の中で直接、対象とかかわる体験と、他者によって捉えられた対象とその表現を通して、間接的にかかわる体験とが生じる。両者が融合する体験も少なくない。

初等教育における総合的な学習指導の先駆者である峰地光重（広島大学でベストタロッチ賞受賞）は、「取得—内化—表現」という学びの構造の「取得」（今日の「理解」に該当）を、「事物をよむ（自然・社会）」と「書物をよむ（教科（文化）」）とに分けていた。この「事物をよむ」が直接的な体験の領域であり、「書物をよむ」が間接的な体験の領域である。

本稿では、「書物をよむ」の例として漱石の『吾輩は猫である』（以下、「猫」とする。漱石と略称するのは、その裏に、『猫』を「国語

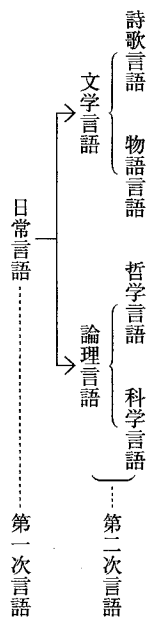
教室」から「言語生活」へ親しく連れ出したい願望があることによる）を取り上げ、その学習行為が「事物をよむ」力にどう転移するか、国語教育における「よみ・かき総合」はどう成立するか、学習個体史の一環として分析してみたい。

二 「よむ」学習行為の立場

「国語教室」と「言語生活」は、両者を対比的に捉える場合はかぎかつこ（一）をつけ、学校の国語教室を包む言語生活は通常の表記とする。その言語生活を、学校での「話す・聞く」「読む」「書く」に対応して、談話生活、読書生活、文章表現生活に分節して考える。これらは相互に関連するが、同時に、電子メールの生活、映像等の視聴生活、インターネット等の情報生活が重なり合っている。先の「事物をよむ」と「書物をよむ」は、これらすべてにかかわりつつ、「書物をよむ」こととなるのが読書生活である。

以下に若干の紙幅をつかって述べることは、言語そのものの学習や言語に関わって学習することの付帯要件ともいべきものである。そのため、必要最低限のことを再録する。¹

言語生活における言語の特性を、竹内芳郎²⁾、大久保忠利らの考えを参考に弁別する。次の図に、詩歌言語と物語言語を加えているのは中例による。



大久保は、日常言語（雑義的）、理論言語（単義的）、文学言語（複義的）に三区区分し、それぞれに専門的に使用する能力を意識した上で、その能力を基礎的に養成することを目ざしている³⁾。

言語の特性に加えて、言語の位相にも注意したい。すなわち、地域・職業・男女・年齢・階級、それに話しことばと書きことばの違いなどである。

因みに、『猫』は文学作品であり、文学言語として結実せしめられたものである。しかし、作品の細部においては、後述するように、言語の特性と位相は自在に駆使されている。じつは、そこを「よむ」学習行為こそが目ざすものの一つなのである。

さらに、「よむ」学習行為の立場として自覚したいのは、その広がり（自由性や活用性）である。学校教育の内容を、「教材内容」「教科内容」「教育内容」の三層に捉えてみる。「教材内容」はその教材に固有の内容が学習の中心であり、「教科内容」は他の教材にも活用することのできる内容、「教育内容」は他の教科にも適用するこ

とのできる内容へと発展する。それに応じて、学習も総合的になっていく。

『猫』の一節が「国語教室」での教材内容の説解に終始すると、教室に閉じ込められ、外からの空気が遮断されて、「よむ」学習行為の広がり（自由性や活用性）には向かわない。

言語の特性・位相と、教材・教科・教育という内容をあわせて、学習の指標を掲げてみると、次のようになる。

		言語コード	
		論述	知識・情報
（関係把握力）	構成	発想・思想	（論理言語）
	要旨	実証の方法	
（批評力）	叙述	人物・事件	（文学言語）
	構成	虚構の方法	
	主題	意図・精神	

この学習の指標は、表現・理解の学習行為の全体に及ぶものであるが、ここでは「よむ」学習行為に焦点をあてる。かつて、読み二つの柱が立てられた。

- A 事実としての情報の読み
- B 虚構としての文芸の読み

この柱を借りて、「事実としての情報」「虚構としての文芸」をどう考えるか、それらを「よむ」学習行為と先の指標はどういう関係になるかを説明してみる。まず、Aからである。

「事実としての情報の読み」というときの「情報」とは何かというと、筆者の提供するいわゆる知識・情報（狭義）、筆者のおこなった実証や論証、その方法、筆者の価値意識や思想などをふくんだもの（広義）である。

そして、「事実」とは、筆者が、現実（自己及び世界）の事象について、問題意識を持ち、思考をめぐらし、あるいは、実験・観察調査等をおこなった結果、

- (1) ある思想や発想を持つその筆者によって、
- (2) 事象（原事実）の中から選択され、
- (3) 意味づけられて、
- (4) 記述（論述）された、
- (5) 事実（現象）

のことである。書かれた事実（現象）は、事象（原事実）そのものではないということである。

これらを、先の指標と重ねていえば、「論述・構成・要旨」は、(4)の「記述（論述）された」にかかわる。

「知識・情報」は、(2)の「事象（原事実）の中から選択され」と(4)(5)の「記述（論述）された事実（現象）」にかかわる。ここは、「はじめて知った、わかった」「ほんとうだろうか」「ほかにはないのだろうか」といった学びの内容となる。

「実証の方法」は、(3)の「意味づけられて」にかかわる。ここにもやはり、筆者が選択し、採用した「思考」「実験」「観察」「調査」「資料提示」等の手続きや方法がある。その吟味は、「論理的思考」に直接かかわる学びの場となる。

「発想・思想」は、(1)の「ある思想や発想を持つその筆者によって」にかかわる。これは、所与の文章・作品の奥行の問題である。その文章の送り手である筆者の総体（あるいは、その立場）に接近し、吟味しようとするものである。

先にもふれたように、この種の文章表現は、『猫』にも自在に出現する。ただ、全体が虚構に包み込まれているために、『猫』の哲学・科学（論理言語）のそれには膜がかかっており、囊中の錐にさわる感がある。

もう一つの柱Bが「虚構としての文芸の読み」である。

「叙述・構成・主題」と「人物・事件」の読みが、その作品の固有性に留まって、作品をよむに終始する場合は、「教材内容」の学びになる。この場合の「人物・事件」の読みは、けつきよく粗筋の把握に落ち着く。

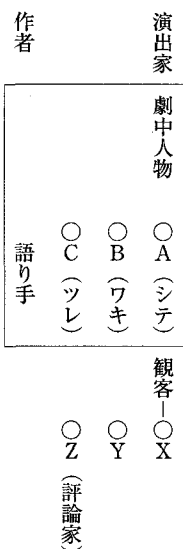
「虚構の方法」は、広義には、事象を、事象そのままよりいっそう真であり善であり美であるように、言語で加工（文学言語化）しつつ、作品世界を構築する方法である。「よむ」とは、その構築のさまを理解し、批評することである。

狭義には、読者のイメージにはたらきかけてくる、視点・異化・トリックスター・対比・プロット・伏線・クライマックス・描写・比喩・象徴・オノマトペ・繰り返し・リズム・省略・空所・倒置などの表現方法を読み解きつつ、批評する。この場合、固有の作品を越えて、文学をよむ点において、「教科内容」の学びとする。

「意図・精神」は、作品を媒介として、その作品が語りかけてくる意図・精神について、仮想の作者と対話することになる。この対

話が、人生をよむ、ことになれば、「教育内容」の学びである。そのとき「人物・事件」も典型化される。

ここで、「虚構の文芸の読み」については、「よむ」学習行為の広がり（自由性や活用性）の推進のために、提案したいことがある。演劇的読解方法、演出的読解方法とでもいふべき読みの実践である。



舞台装置 (係) 小道具 (係) 衣装 (係)
照明効果 (係) 音響効果 (係)

こういう読みは、戯曲 (脚本) の上演という経験からきたものであるが、文学作品を「劇」的に読んでいく極致は、演出家のそれにあると思う。一方に、演劇評論家の仕事があり、両者は、演じる側と観る側の代表である。

演出家の仕事は、劇中人物の演技に留まらず、それこそ舞台装置、小道具、衣装、照明効果、音響効果から、肝心の劇の構成・進行などのすべてにわたっている。当然のことながら、そこには創造的読みが入ってくる。

学び手の作品をよむ態勢が、舞台上に参画する位置でのものか、

観客席での客観的な位置でのものかは、学び手それぞれの気質にもよると思う。提案したいのは、すくなくともこれまでの単なる受け身の観客の立場からの脱却である。すなわち、「よみ」の態勢の自覚を、

- (1) 身を乗り出して劇中人物と対話、交流する態勢へ
 - (2) 劇中人物を演じる態勢へ
 - (3) 舞台装置、小道具、衣装、照明効果、音響効果等を設定する態勢へ
 - (4) 劇を演出する態勢へ
 - (5) 劇を批評する態勢へ
- 振り向けていきたい。

以上、「よむ」学習行為の立場（付帯要件となるもの）について論じてきた。これらの立場（付帯要件）が整わなくては学習は進められないというつもりはない。むしろ、折々にこれらの要件を振り返ることによって、自分の「よむ」学習行為をメタ認知しつつ、広がり（自由性や活用性）を求めたいということである。

けれども、提言したものとしては、漱石の『猫』の「よみ」を通して、これらの付帯要件を実あるものとしなくてはならない。

三 『猫』の構造をよむ

「構造」は、「構成」をより動的、立体的に捉えようとするものである。⁴

『猫』は十一の章で構成されている。内容をほくして、次のような四つの筋目を捉えてみた。⁵⁾

A 主人（苦沙弥）、迷亭（美学者）、水島寒月（理学士）、越智東風らが展開する逸民の談話世界。後から、八木独仙（哲学者）、部分的に迷亭の叔父が加わる。

B 寒月と金田家令嬢（富子）の婚約をめくって、A世界に絡んでくる鈴木藤十郎、多々良三平、金田、妻鼻子、娘富子などがみちびく実業金権との対立、葛藤の世界。部分的に、金田の取り巻き、中学生たち、古井武右衛門が加わる。

C 主人、細君、子供、御三、下女がいとむ日常生活の家庭的な内輪の世界。後から、雪江、部分的に泥棒が加わる。

D 吾輩が展開する猫的世界。生態的な猫の側面と擬人的な猫の側面とが描かれる。

この四つの筋目はいずれも、猫の吾輩が、X「体感したこと・見たこと・聞いたこと・読んだこと」、Y「読者にはわかる猫語で話したこと・為したこと」、その両方を通じてZ「感じたこと・思ったこと・考えたこと」の統括下に置かれている。

四つの筋目を縦のものとすると、小説の進行にしたがって、ある場面では、AとBが横につながり、別の場面ではBとCが横にわたりあうといった按排になる。Dは、ABCの人間世界を俯瞰する猫世界の位置にあつて、ABCの縦横をつなぎ、空所を埋めるはたらしきをする。

『猫』の中心軸はAの逸民の談話世界にあると見るが、そのAの世界にゆさぶりをかけるのが、Bの実業金権の一般社会という外か

らの絡みであり、Cの家庭の日常生活という身体生理的なものを含んだ内からの絆である。

構造上、AとBを絡ませる話材源として水島寒月の縁談が設定された。

寒月は、「この男がどういう訳か、よく主人の所へ遊びに来る。来ると自分を恋こぼっている女がありそうな、なさそうな、世の中が面白おもしろいような、詰つまらなそうな、凄こわいような艶びっぽいような文句ばかり並べては帰る。」として、「二」章で登場した人物である。

『猫』は「一回読み切りのつもり」（斎藤恵子注）が、好評続編となつて、「想」が広げられたのである。

寒月は、椎茸を噛み切ろうとして前歯を欠いたという状態で登場し、その風采とは不釣り合いながら、さる令嬢二人とヴァイオリンを演奏した話をする。この令嬢の一人（金田富子）が伏線となつて、後にB世界との絡みを起こすことになる。ヴァイオリンもそこそこのはたらしきをする。

一方、寒月と外出した主人は三杯の正宗を飲んで、その翌朝、雑煮を六切か七切食つて最後の一切を椀の中に残す。主人が胃弱であること、神経衰弱的であることは、全編に繰り返されるほどであるが、この場合の主人の異様な食欲が、D世界での吾輩の「雑煮食い事件」を誘発する。このD世界の筋目は、「一」での「車屋の黒」との出会いを受け、あわせて「新道の二絃琴の御師匠さんの所の三毛子」との語らいという硬軟二極が用意される。しかし、軟のほうの三毛子は風邪がもとで死亡（それも教師の所にいる薄ぎたない雄猫がむやみに誘い出したせいだとされる）し、硬のほうの黒は足を

損ねて消沈、早々と表舞台から消える。

このように、A世界からD世界へと飛び火し、またA世界へ帰る。

A世界には、寒月の紹介によって東風が訪れ、その東風が迷亭のトチメンボー注文の一件を語る。東風が帰ると、迷亭からの年始の手紙が届く。こうして、A世界を形成する主要メンバーが登場し、「一」とあわせて、迷亭のかつき屋としての性格も明らかになる。

四、五日後に、迷亭、寒月、主人がそれぞれに「霊の感応」ともいふべき体験談を語る。寒月のは、霊の声に引かれて身投げをする話だが、その霊の声というのが、先の令嬢のものという設定である。主人のは、細君を義太夫語りにつれていく約束が急病になってしまったという話である。この話の真意はどうかやら、しつけぬことをしようとする霊のわざわいが起こるといった、細君に対する弁解にありそうである。ここからは、C世界につながる。

これらの話を受けて、吾輩の人物評は「要するに主人も寒月も迷亭も太平の逸民」だというのであるが、吾輩の評は特に主人にきびしい。

「三」章以降の寒月の縁談の筋は、まず、迷亭の来ている苦沙弥郎へ、例の令嬢の母親（金田鼻子）が、寒月についての人物調査や結婚の条件を言い立てに来るところから動き始める。ここでこのやりとりからA世界とB世界相互の誹謗中傷や揶揄嘲笑の応酬になる。吾輩もD世界から金田郎の動静の偵察に出かける。それは、「四」章にもつづく。「四」章では、金田の依頼を受けた鈴木藤十郎が主人に対して説得にかかるが、後からやってきた迷亭がまぜかえす。

「五」章は、苦沙弥郎に泥棒が入る。C世界のことである。この

とき、多々良三平のくれた箱入りの山の芋が盗まれる。この三平はB世界から金田令嬢に関わる人物である。D世界では、吾輩が鼠取りに挑戦し失敗に終わる。

「六」章の寒月は、結婚の条件になっている博士号をとるために、珠を磨くことに廿年はかかると言い始める。かとおもえば、俳劇なるものを発表する。後から来た東風は、富子（金田令嬢）に捧げるという新体詩を披露する。

「七」章は、吾輩のD世界における健康論・運動論とB世界の洗湯探訪が中心である。

「八」章は、主人に対する私立中学校生徒のいたずら・からかい（B世界の金田のさしがね）と、鈴木による調停が中心である。この件は「三」章を淵源とする。自己の逆上を内省し始めた主人に、珍客（哲学者八木独仙）が一つの道を示唆する。考え方は似ているようにも、迷亭を不真面目とすれば、独仙は生真面目である。独仙は、A世界の籬（かき）を締める人物として登場せしめられた感がある。

「九」章は、迷亭が伯父をつれて来、主人の発言に独仙の影響を見抜く。「五」章での泥棒が捕まり、日本堤分署に出頭する設定で、主人は吉原を覗く。

「十」章は、C世界である。子供たちの洗顔、食事の後、妙な人として雪江が登場する（姪であるが、これまで気配も見せなかったので「妙な人」としたか）。この雪江と細君の談話の中で、鈴木、独仙、三平、金田令嬢、新体詩集、東風、艶書、寒月といったもの・こと・ひとが話題になり、関係に括りがつけられていく。古井武右衛門は、艶書の話題につけられた付箋のような存在である。

最終章の「十一」章は、まず、主人、迷亭、独仙、寒月、東風の揃い踏みである。寒月はくどくどと長いヴァイオリン修業の話の後で、すでに結婚したことを告白する。そこから、主人、迷亭、独仙らは、探偵論、自殺論、結婚（別居）論、文明論、女性論等を展開する。一区切りついたところへ、三平が現れ、金田令嬢との結婚を告げる。

吾輩は、登場人物たちの総評を行い、「二」章の「雑煮食い事件」との照応よろしく、「ビール飲み事件」を起こして昇天する。「人間の」でありすぎたことの咎であろう。

四 「よむ」学習行為の深化

「よむ」学習行為の付帯要件を再録すると、次のようになる。

- 1 言語の特性・位相を意識する。
 - 2 教材・教科・教育の内容を捉える。
 - 3 1と2をあわせた学習の指標に向かう。
 - 4 演劇的読解方法・演出的読解方法を実践する。
- 要するに、3と4の実践である。三の「猫」の構造をよむ」試みの過程で、3の「学習の指標」のうち、「構成」「主題」「人物・事件」「虚構の方法」については、あらかじめの実践を終えている。

問題は「学習の指標」のうちの「叙述（論述）」である。ここに、1の「言語の特性・位相」も、2の「教材・教科・教育の内容」も具体的な姿・形をとまなびて出現する。ただ、作品のすべてが叙述であるから、ここでは、吾輩（猫）が対象を客観的に見聞するとこ

ろではなく、吾輩自身のこと、吾輩と人（主人）のこと、吾輩と他のことに分け、吾輩が主体的に関わる場所に焦点をあててみたい。どこを切っても、「猫」の叙述の特徴は現れる。

まず、吾輩自身のことである。作品の終わり近く、吾輩は次のように述懐する。

猫と生れて人の世に住む事もはや二年越しになる。自分ではこれほどの見識家はまたとあるまいと思っていたが、先達てカーテル・ムルという見ず知らずの同族が突然大気燄を揚げたので、ちよつと吃驚した。よくよく聞いてみたら、実は百年前に死んだのだが、ふとした好奇心からわざと幽霊になって吾輩を驚かせるために、遠い冥土から出張したのだそうだ。この猫は母と対面をするとき、挨拶のしるしとして、一匹の肴を啣えて出掛たところ、途中でとうとう我慢がし切れなくなつて、自分で食ってしまったというほどの不孝ものだけあつて、才気もなかなか人間に負けぬほどで、ある時などは詩を作つて主人を驚かした事もあるそうだ。こんな豪傑が既に一世紀も前に出現しているなら、吾輩のような碌でなしはとうに御暇を頂戴して無可有郷に帰臥してもいいはずであつた。（十一）

これは、当時、藤代素人によつて、百年前のホフマンの小説『牡猫ムルの人生観』に吾輩の先輩がいたことが揶揄的に紹介されたこと（斎藤恵子注）を受けての物言いである。各文が比較的長い。自分のことを「見識家」と言つたり「碌でなし」と言つたり、また相手についても、「大気燄」「ふとした好奇心」と言つてみたり「不孝もの」「才気」「豪傑」と言つてみたり、吾輩は、揶揄的に応酬しな

がら落ち着きどころを模索する。この猫のムルを幽霊とはいえず「他」と捉えたと、これは三つ目の例示にすべきだったかもしれない。

吾輩自身の言動で他に取立立てるとすれば、一つは「雑煮食い事件」であり、二つに吾輩の運動論の中の「松滑り」であり、三つには「ビール飲み事件」であろう。

「雑煮食い事件」も「ビール飲み事件」も、今日ふうにはドジな猫の、まさに実況を見ているような叙述（演劇的読解方法によれば単体験の可能な叙述）であるが、ここでは「松滑り」の解説に耳傾けてみよう。これも吾輩らしい物言いである。

今吾輩が松の木を勢よく馳け登ったとする。すると吾輩は元来地上の者であるから、自然の傾向からいえば吾輩が長く松樹の巖に留るを許さんに相違ない。（中略）落ちると降りるのは、ちとりの差である。吾輩は松の木の上から落ちるのはいやだから、落ちるのを緩めて降りなければならぬ。即ちあるものをして落ちる速度に抵抗しなければならぬ。吾輩の爪は前申す通り皆後ろ向きであるから、もし頭を上にして爪を立てればこの爪の力は悉く、落ちる勢に逆って利用出来る訳である。従って落ちるが変じて降りるになる。実に見やすき道理である。しかるにまた身を逆にして義経流に松の木越をやって見給え。爪はあつても役には立たぬ。ずるずる滑って、どこにも自分の体量を持ち答える事は出来なくなる。是においてか折角降りようと企てた者が変化して落ちる事になる。この通り鴨越は六ずかしい。猫のうちでこの芸が出来る者は恐らく吾輩のみであろう。

〔七〕

この叙述の前に、「馳下がるには二法ある」とある。尾を下にして降りると頭を下にして降りるのである。この文脈からすれば、おわりの吾輩のみが出来る「この芸」とは鴨越をさす。ついでに言えば、この叙述は、ほとんど論理言語である。こうした理屈をこねること、よくいえば分析的なものを捉えることにかけて、吾輩は、「猫」の他の登場人物たちにひけをとらない。

次に、吾輩と人（主人）のことである。捨て猫の吾輩を救つたのはほかならぬ主人の一言によつてである。いわば命の恩人であるが、吾輩の視点から語る主人評価は、貶すことが多く、褒めることはほとんどない。主人は、吾輩を単なる飼ひ猫扱いにしている。以下、事例をあげてみる。

かつての同級生である鈴木藤十郎が訪ねてきたとき、主人は、その名刺をもつてひとまず後架（便所）に逃げ込む。吾輩は、客用の座布団に先に座つて客がどうするか様子を窺う。じつは、吾輩の行動は、鈴木藤十郎がB世界の金田一派からの回し者であることを知つてのことである。主人は知らない。

吾輩と鈴木君の間に、かくの如き無言劇が行われつつある間に主人は衣紋をつくらつて後架から出て来て「やあ」と席に着いたが、手に持っていた名刺の影さえ見えぬところを以て見ると、鈴木藤十郎君の名刺は臭い所へ無期徒刑に処せられたものと見える。名刺こそ飛んだ厄運に際会したものだと思つてもなく、主人はこの野郎と吾輩の襟がみを攫んでえいとばかりに縁側へ擲きつけた。（四）

気がねする相手だけに、身内への当たりがきびしくなる。別の章

では、次のような処遇もある。

「おい、その猫の頭をちよつと撲ぶつて見ろ」と主人は突然細君に請求した。

「撲ぶてば、どうするんですか」

「どうしてもいいからちよつと撲ぶつて見ろ」

こうですかと細君は平手で吾輩の頭をちよつと敲たく。痛くも何ともない。

「鳴かんじゃないか」

この後、主人のさらなる請求と、例によつて主人の意図についての吾輩の詮索が始まる。分析と批評が終わり、注文通りにヤーと鳴く（鳴いてやる）。

すると主人は細君に向つて「今鳴いた、にやあという声は感投詞か、副詞か何だか知ってるか」と聞いた。

細君も、吾輩も答えない。主人は大きな声で「おい」と呼びかけ、細君がびっくりして「はい」と答える。

「そのはいは感投詞か副詞か、どっちだ」

「どっちですか、そんな馬鹿氣た事はどうでもいいじゃありませんか」〔七〕

という展開になる。吾輩の視点からはこの世界に大いに関わっているが、主人からすれば、単に撲ぶつて鳴かせただけの話である。

おわりに、吾輩と他のことである。「他」には、人ではなく猫、鼠、蟻、蟬、鳥などが入る。蟻、蟬、鳥は、「七」の吾輩の運動論である蟻、蟻狩り、蟻取り、垣巡りに出てくる。ここでは、猫と鼠の場合を取り上げる。

先の「猫」の構造のところで、「車屋の黒」と「新道の二絃琴の御師匠さんの所の三毛子」の硬軟二極の配置を指摘した。

「車屋の黒」は、「彼は猫中の大王ともいべきほどの偉大なる体格」で登場する。

静かなる小春の風が、杉垣の上から出たる梧桐の枝を軽く誘つてばらばらと二、三枚の葉が枯菊の茂みに落ちた。大王はかつとその真丸まゐの眼を開いた。今でも記憶している。その眼は人間の珍重する琥珀こはくというものよりも遙かに美しく輝いていた。彼は身動きもしない。双眸そうまの奥から射る如き光を吾輩の矮小たなる額の上にあつめて、御めえは一体何だといった。大王にしては少々言葉が卑しいと思つたが何しろその声の底に犬をも挫ひしぐべき力が籠こもっているので吾輩は少なからず恐れを抱いた。しかし挨拶かきをしないと剣呑けんおんだと思つたから「吾輩は猫である。名前はまだない」となるべく平氣を装つて冷然と答えた。しかしこの時吾輩の心臓は健かに平時よりも烈はげしく鼓動しておつた。彼は大に輕蔑けいべつせる調子で「何、猫だ？ 猫が聞いてあきらめろ。全てえどこに住んでるんだ」随分傍若無人である。

〔一〕

この黒の登場のしかたは、その後の活動からすると、ぜいたくに過ぎるものである。（「猫」には、漱石が叙述を楽しんでいる、そう感じさせるものが少なくない。）この黒のもの言ひには、言葉の特性・位相があらわである。

もう一つは、三毛子である。

杉垣すゐの隙すまから、いるかなと思つて見渡すと、三毛子は正月だ

から首輪の新しいのをして行儀よく椽側に坐っている。その脊中の丸さ加減が言うに言われんほど美しい。曲線の美を尽している。尻尾の曲がり加減、足の折り具合、物憂げに耳をちよいちよい振る景色なども到底形容が出来ん。ことによく日の当る所に暖かさうに、品よく控えているものだから、身体は静肅端正の態度を有するにもかかわらず、天鷲毛を欺くほどの満らかな満身の毛は春の光りを反射して風なきにむらむらと微動する如くに思われる。(二二)

この三毛子に、吾輩は「三毛子さん三毛子さん」と呼びかける。三毛子は、「あら先生」と椽を下り、吾輩の傍に来て、「あら先生、御目出度う」と尾を左りへ振って挨拶する。教師の家にいるものだから先生ということのだが、「町内で吾輩を先生と呼んでくれるのはこの三毛子ばかりである。(中略)吾輩も先生といわれて満更悪い心持ちもしないから、はいはいと返事をしていゝ」とある。

三毛子は風邪がもとでもなく亡くなるが、病気の段階で下女がする噂話は、風邪を引いたのは悪い友達のせいであり、それは「あの表通りの教師の所にいる薄ぎたない雄猫」だというのである。この間接のつらい評価を、吾輩はかくさず読者に語り伝える。ただ、猫世界にあつては、黒や三毛子との関係において、吾輩の「猫の品格」は高められる。

吾輩が転生を願つたのか、猫としての不自然さを払拭するためか、吾輩が鼠取りに挑戦する。その闘争のただ中を抜いてみる。

彼は棚の上から吾輩を見卸す、吾輩は板の間から彼を見上ぐる。距離は五尺。その中に月の光りが、大幅の帯を空に張る如

く横に差し込む。吾輩は前足を力を入れて、やつとはかり棚の上に飛び上ろうとした。前足だけは首尾よく棚の縁にかかったが後足は宙にもがいている。尻尾には最前の黒いものが、死ぬとも離るまじき勢で喰い下っている。吾輩は危うい。前足を懸け易えて足懸りを深くしようとする。懸け易える度に尻尾の重みで浅くなる。二、三分滑れば落ちねばならぬ。吾輩はいよいよ危うい。(二五)

比較的短文を重ねていく叙述が、緊迫感を呼ぶ。こういう場合でも、吾輩の理づめの傾向はかわらず、けつきよく転落して、鼠取りは失敗に終わる。

こうして吾輩の言動からその人物像を追つてくると、吾輩が「主人も寒月も迷亭も太平の逸民」と評した、その言葉はそのまま吾輩にも「太平の逸猫」として当てはまりそうである。

五 「よむ」学習行為の拡充

「よむ」学習行為の付帯要件に、よみ深める方向(深化)とよみ広げる方向(拡充)がある。今回、よみ広げる方向(拡充)については、そのための素材メモに留めたい。

1 お茶の水文学研究会「文学の中の「猫」の話」(集英社文庫、一九九五)

猫についてよみ広げるためには、恰好の手引き書である。

本書は、無数にある猫文学の中から代表的な文学作品約

一〇〇点を紹介したものです。それらの作品には、どのような猫が、どのようにして登場し、そして、どのような役割を果たしているか。ストーリーを追いながら、エピソードや雑学的知識を交えて分かりやすく解説したものです。気軽に読める、楽しい猫文学ガイドを目指しました。

この書の「第一章 おしゃべりな猫」のトップバッターが、漱石の『猫』である。

「よむ」学習行為論は、この論考をまとめる最中も進行する。ごく最近も、劇団四季の『キャッツ』のパンフレットでT・S・エリオットの名を見た。このミュージカルは未見であるが、1の文献を見ると、『ふしぎ猫マキャヴィティ』というのが出てくる。これがそうかという確認行為が、「国語教室」から「言語生活」への出口になる。

2 「歳時記」の「猫の恋」(山本健吉「基本季語五〇〇選」講談社学術文庫、一九八九)

『猫』の叙述に出てくるので確認する。「ほのかに承われれば世間には猫の恋とか称する俳諧趣味の現象があつて、春さきは町内の同族どもの夢安からぬまで浮かれ歩く夜もあるとかいうが、吾輩はまだかかる心的変化に遭^あ達した事はない。」というものである。ただ、「回顧すればかくいう吾輩も三毛子に思い焦がれた事もある。」(「五」という告白はある。

3 安房直子「ひぐれのお客」

1の『文学の中の「猫」の話』には紹介されていないので、ここに取り上げておく。

裏通りの小さな洋品店を営んでいる山中さんのところに、ある日のこと、まっ黒いねこがやってくる。黒いマントに赤い裏をつけたい、その布がほしいというのである。山中さんが見つくりうと次々に布地がだめ、色がだめだと言う。その言い分はこうである。

「赤は、全体に、あつたかい色ですけどね、そのあつたかさにも、いろいろありましてね、お日様のあつたかさ、ストーブのあつたかさ、それから、夜の窓にともっている明かりのあつたかさ……これ、みいんなちがいます。それから、ストーブのあつたかさにも、まきストーブと、ガスストーブと、石油ストーブがありますけどね、ぼくはまきストーブの感じが好きなんです。まきストーブが、パチパチ音をたてながら燃えるときのあの感じ。ただ、あつたかいだけじゃなくて、こう、心が安まつて、いつのまにか、ふうつと、ねむくなってゆくような感じですよ。不完全燃焼やら、ガスもれなんか気にしないで、森や林や野原のことを考えながら、安心してねむれる、あの感じは、もう、まきストーブにしかありませんからねえ。」

それで、ねこは、出された裏地をなめ、においをかき、耳をつけ、そつとさすつて、まきストーブの火の色の布地を探し当てるのである。きつちり文明批評をおこなっている。時代は違うが、吾輩に会わせてみたいねこである。

4 トーベリヤンソン・渡部翠訳「猫」

これも1には紹介されていない。

ソフィアという思春期にさしかかった多感な少女が、人やものを愛する（裏返しに嫌悪する）ことについて葛藤する。その愛憎の対象となったのが、灰色がかったマツペ（という猫）であり、白いスヴァンテ（という猫）である。

マツペは、ソフィアがかまえばかまうほど、野性化する。ネズミはもちろん小鳥まで殺害し始め、さすがにソフィアもマツペを遠ざけ、マツペは孤高を生きる。そこへベットの手本のようなスヴァンテがやってきて、マツペは捕まえられトレードされる。ソフィアとスヴァンテの蜜月はしばらくつづくが、ほどなく破綻する。嵐の夜、ソフィアは、スヴァンテに対して「獲物を捕ったらどうなのよーなにか、やりなさいってば！ 猫らしくしてよ！」と叫ぶ。結果、マツペが復帰してくる。

『猫』では、ソフィアは金田富子であり、マツペは車屋の黒である。時代が違い、国が違い、境遇が違っても、人物の生き方はどこか似通う。

5 飯沢匡「伊曾保鼠」〔飯沢匡新狂言集〕平凡社、一九八四

この作品では、猫はツレである。田舎鼠がシテ、都鼠がワキということになる。

四の「よむ」学習行為の深化で、『猫』の鼠取りのエピソードを取り上げたが、この「伊曾保鼠」は逆の視点になる。人物の紹介は、田舎鼠（のんびりとした勇敢な男）、都鼠（ノイローゼ気味の落ち

着かぬ洒落男）、猫（老いぼれて、半身不随の大古猫。ただし威厳だけは残っている）というものである。

この狂言は、鼠と猫の争いというよりも、都市文明に対する風刺である。鼠からの視点、狂言（戯曲）というジャンルに着目して、よみ広げの素材に加える。

注

- (1) 拙稿「言語生活事始―意識的、積極的なことば学びのために―」〔凱風〕第十九集、二〇〇七掲載予定
- (2) 竹内芳郎「言語・その解体と創造」〔筑摩書房、一九七二〕
- (3) 大久保忠利「人間教師の文学教育」〔一光社、一九七七〕
- (4) 「猫」の構造については、次の論考にも記している。拙稿「表現教本『吾輩は猫である』」〔漱石作品を読む―二七会輪読五十年―〕淡水社、二〇〇八刊行予定
- (5) 『吾輩は猫である』のテキストとして、岩波文庫版（一九三八・二・二五第一刷、一九九〇・四・一六改版第一刷、二〇〇六・八・四第二七刷）を用いる。
- (6) よみ広げる方向については、次の書で実践的に展開している。拙著『ことば学びの放射線「歳時記」「風土記」のこころ』〔三省堂、二〇〇七〕

（なかつ まさたか・兵庫教育大学）